後志文学ツーリズム
〈日本海側編〉

後志には、文学がある。

後志を舞台にした文学は、実はたくさんあります。

誰もが知っているあの作品から、ちょっと意外なあの作品も・・・。文学の舞台を訪ね歩くと、その地の歴史や文化が見えてきます。

今回はちょっと違った視点から、後志を旅してみませんか。

幸田露伴「突貫紀行」

①幸田露伴句碑（余市水産試験場中庭）

まずは、明治の文豪、幸田露伴ゆかりの地から。「五重塔」などで知られる幸田露伴（本名：成行／しげゆき）は、明治１８年７月から明治２０年８月までの間、余市の水産試験場の近くにあった電信局で、電報の収受を行う電信助手として働いていたのです。

しかし、どうしても文学の志を捨てきれず、明治２０年８月２５日、その職を捨てて帰京の突貫紀行を決意したのでした。

「身には疾（やまい）あり、胸には愁（うれい）あり、悪因縁（あくいんねん）は逐（お）えども去らず、未来に楽しき到着点の認めらるるなく、目前に痛き刺激物あり、慾（よく）あれども銭なく、望みあれども縁遠し、よし突貫してこの逆境を出でむと決したり。五六枚の衣を売り、一行李（こうり）の書を典し、我を愛する人二三にのみ別れをつげて忽然出発す。時まさに明治二十年八月二十五日午前九時なり。」（「突貫紀行」より）

弱冠二十歳で東京まで１０００キロを超す旅を敢行した成行青年。体調も悪い中、福島から郡山までは徹夜で歩いたと云われ、その極限状態で詠んだ句、

「里遠し　いざ露と寝ん　草まくら」から「露伴」の雅号をつけたとか。その時の熱い思いと厳しい突貫道中を忘れないように、との思いからでした。

塩鮭（からざけ）の　あ幾（ぎ）と風ふく　寒さかな

碑に書かれた句。この碑は、余市のシリパ山の自然石を運んで台座とし、露伴の自筆をもとに作られたそうです。

この地で文学への志に燃えていた成行青年。この地で、冷たい風に頬をさらしながら、その意志を確固たるものにしていったのです。その活動の枠は文学にとどまらず、その精神世界の巨大さに「大露伴」と「大」の字を冠して呼ばれていたという幸田露伴。その原動力は、この地で志を固め、突貫紀行を敢行したあの若き日の熱い思いにあったのかもしれません。

森　瑤子「望郷」

②　旧竹鶴邸（ニッカウヰスキー余市蒸留所）

さて、余市といえば「マッサン」。ニッカウヰスキーの創業者、竹鶴政孝とその妻、リタの生涯を描いたNHKの朝ドラをきっかけに、この地が一躍有名になったのは記憶に新しいところです。

ここでは文学作品として、同じく二人の生涯を描いた森瑤子の「望郷」を見てみましょう。

この作品は妻リタに焦点を当て、少女時代の悲恋から、政孝との出会いと結婚を経て、二人で「日本一のウイスキー作り」という夢を叶えていく様子を丁寧な筆致で描いています。

ニッカウヰスキー余市蒸留所にある旧竹鶴邸の中には、和洋折衷のしつらえが残っており、二人の生活を垣間見ることができます。

「親愛なるリタへーーー昨日、余市川を遡ってみました。そしたら、なんと、湿原から切りだした草灰（ピート）を乾かして、農家では竈や風呂を焚いているではないか。その時のぼくの驚きを想像してみてください。思わず血が逆流するような、目眩（めまい）のような、筆舌に尽しがたい感動に襲われました。草灰（ピート）が出るくらいだから、その地下から湧き出る水質は清冽で申し分ない。ついに理想の土地を見つけました。」
（「望郷」より）

③　余市川

ニッカウヰスキー余市蒸留所
〒０４６－０００３　余市郡余市町黒川町７－６
営業時間　９：００～１７：００
休業日　年末年始（臨時休業あり）
※ガイドツアーも行っています。（事前予約が必要）
詳しくは、施設にお問い合わせください。

１９７７年、「情事」で衝撃的な文壇デビューを果たした森瑤子。彼女の描く、家庭や慣習に縛られない自由で洗練された女性像は、大きな話題を呼びました。
「望郷」は１９８８年に発表されました。この作品は、妻リタを主人公に描かれており、ドラマとは違った視点から二人の生涯を知ることができます。故郷を離れ、余市という異国の地で、孤独や偏見に耐えながら、政孝を献身的に支えたリタ。彼女の心を支えたのは大切な家族の存在でした。

またこの作品では、リタの教育方針や、養女リマ（作中では沙羅）との葛藤についても描かれており、女性として考えさせられる部分も多くあります。

妻として、母として、懸命に生き抜いたリタの姿を描くことで、森瑤子は、自分自身をも含めた女性の苦悩、そしてひたむきさ、強さを伝えたかったのかもしれません。

吉田一穂（よしだいっすい）「白鳥古丹（カムイコタン）」

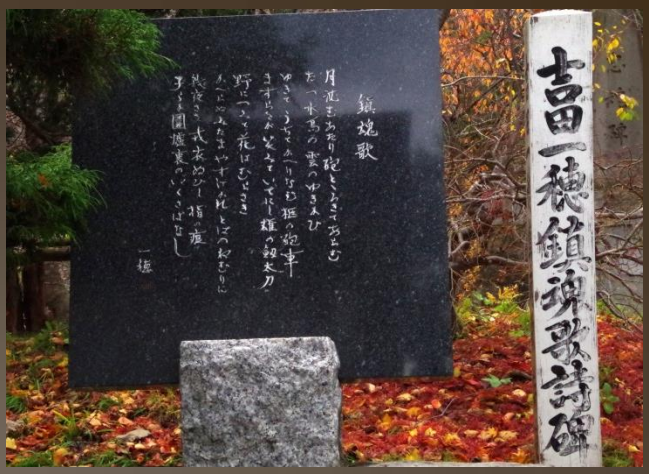
お次は、古平町にゆかりのある詩人、童話作家の吉田一穂（いっすい）を紹介しましょう。

「〈白鳥古丹（カムイコタン）〉はこの時空に現存しない私のふるさとである。Ｃｙｇｎｕｓ Ｓｗａｎの故地は今の鳥類学をもってしても不明だが、私の失った碧玉を海と断崖の峡江に求めて、東経一四〇度三八分・北緯四三度一六分を起点にコンパスを据えれば、北日本海の怒濤と吹雪の中から荒寥たる積丹半島の厳しい姿が現われてくる。その東岸フレ・ピラはアイヌ語の赤い岩の義で、当字して〈古平〉と誌し、慶長年間来の鮭と鰊の一漁場として、私の幼少時代を過した土地である。雪の結晶と海の運動の元始の国で、生とは、世界とは何かと、永遠と無限に触れたわが発想の地でもある。だが今はまさにＤｅｓｏｌａｔｅ ｄｉｓｔａｎｃｅ である――――　ここから私の幻想の地図が始まる。」（「積丹半島」より）

④　吉田一穂　文学碑（白鳥古丹）

上磯郡木古内町に生まれ、幼少期を古平町で過ごした吉田一穂。彼はこの地を「白鳥古丹（カムイコタン）」と呼んでこよなく愛しました。古平町には、彼の詩碑が多く残されています。

⑤　吉田一穂　詩碑「魚歌」（古平町　厳島神社）



⑥　吉田一穂　詩碑「鎮魂歌」　（古平町　琴平神社）

詩情溢れる言葉で織りなす吉田一穂の世界は、一見難しく感じられるかもしれません。でも、遠い異国の地の峡江（いりえ）を積丹半島のそれと重ね合わせ、幻想の世界に遊んだという彼の幼少期は、さぞ喜びに満ちていたことでしょう。

「追分節の哀愁に残る高島岬から忍路、蘭島、スコットランドをもって任じるウヰスキーと露伴先生ゆかりの地を誇る余市、それから私のふるさとを経て美国、幌武意、入舮、余別に至る一条のカムイ・ラインの風光は、その曲折、湾入、海中奇岩、波蝕洞、同じ様式であるが、清澄な海水と対して、その美しさは息をのむ。殊に夏の海は紺碧に匂うばかりである。」（「積丹半島」より）

彼が綴る珠玉の言葉で、あらためて私たちはふるさとの美しさに触れ、その価値を再認識することになるのです。

長田幹彦（ながた　みきひこ）「漁場より」

「月はおぼろに東山・・・」の祇園小唄を作詞し、耽美派として谷崎潤一郎と並び称された作家、長田幹彦も、大正時代に後志を訪れていました。

東京生まれの彼は、大学在学中に北海道に渡り、炭鉱夫や鉄工夫、旅役者の一行などに身を投じて各所を放浪し、その体験をまとめた作品で高い評価を得ました。

彼は大正３年の春、資産家であった梅沢家の若主人の招きで岩内に足を踏み入れ、鰊漁に立ち会っています。その時の体験を元に書いたのが「漁場より」です。

汽車で小樽から余市、仁木を過ぎて小沢駅から岩内線に乗り換え、岩内へ。その足取りをたどってみましょう。

⑦　銀山駅　（無人駅）

静かな山中に線路が続く、ひっそりとした、味わい深い無人駅でした。

「小樽を出る頃から空は俄（にわか）に曇ってきた。忍路。余市を過ぎて、余市川の峡谷から漸次（だんだん）と銀山の山地へ入ると、曇り空は益々低くなってきて、とある隧道（トンネル）を出るともうそこから先は一間さきさえ見えないような大吹雪となってしまった。蓬々と吹き荒ぶ風と一緒の烟のような粉雪はまるで大火の火先のように真暗になって渦巻いてくる。針葉樹の樹立は針金のように吹き撓（たわ）められて、時々二重硝子の車窓をとおしてその凄まじい悲鳴が聞こえてくる。列車もその猛勢にはばまれて銀山駅では殆ど四十分の余も停車してしまった。」（「漁場より」）

「小沢へ着く頃にはもう二尺余の積雪が大地を掩（おお）っていた。内地ではもうそろそろ若葉が芽ぐむ頃に、この北の国ではこうした恐ろしい吹雪が荒れ狂っているのである。私はそこで岩内線へ乗換えをしなければならないので、脛まで埋む雪のなかを粗末なプラットフォームからプラットフォームへ渡って行った。そして唯一人の旅客と一緒に暖炉（ストーブ）を焚いて植民地の列車らしい二等車室へ乗り込んだ。」（「漁場より」）

⑧　小沢駅

岩内線のホームがあった跡と思われる柱も。

昭和６０年まで、小沢駅から岩内駅まで、国鉄岩内線が走っていました。

岩内は鰊漁で栄えた良港で、沿線には茅沼炭鉱、銅を産出する国富鉱山があり、海産物や石炭、鉱物の運搬には欠かせない路線でした。

小沢駅には、「国鉄岩内線一番ホーム跡地」という立て看板と、当時の建造物の跡と思われる柱が３本、残っています。

かつて「寅さんシリーズ」のロケにも使われたことのあるこの駅は、駅舎こそ簡易なものに建て替えられましたが、跨線橋は当時のままの重厚な造りとなっており、階段を上ると、駅職員一同による町内景勝地の絵が出迎えてくれます。

⑨　幌似鉄道記念公園

旧岩内線の駅はすべてが現存しているわけではありませんが、幌似駅のあった場所には「幌似鉄道記念公園」があり、旧岩内線の資料や列車、線路の一部などが展示されています。（資料館は４月２９日～１０月３１日まで、月曜日休館）。鉄道ファンにとても人気のある場所だとか。

駅舎やホームも、当時の面影を残しながらきれいに整備されています。鉄道への愛が感じられました。１００年以上前のこの駅を、長田幹彦も通過したのです。

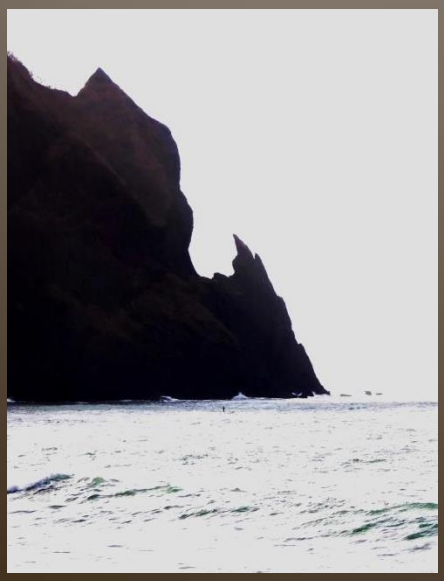
⑩　旧岩内駅跡　看板

さて、路線巡りもいよいよラスト。終点岩内駅です。駅のあった場所は、現在「道の駅いわない」と岩内バスターミナルになっています。道の駅のトイレ側の公園に、「日本国有鉄道岩内線開通当時の岩内駅」の看板がありました。

写真を見ると、立派な建物。当時は重要な交通拠点だったことがうかがわれます。

「私達を乗せた数台の車は、やがてどろどろになった雪の上を駛（はし）って行った。私は幌の間からその光景を飽かず眺めて行ったが、その時町へ入ると直ぐから異様な臭気が鼻を衝くのに驚いていた私は、その臭気が鰊の匂いだと云うことにやっと気がついた。鰊はこの町の生命であり血であったのである。」（「漁場より」）

さて、岩内に着いて早々、幹彦は梅沢家の客として手厚いもてなしを受けます。そしてある日、梅沢氏に誘われて、幹彦も漁に出ることになりました。



「岩内の町は漸次（だんだん）と水平線の底に沈んで、ゆるい傾斜に沿って建てられた白壁だけが点々としてみえるばかりである。イワヌプリの裾と、稲穂峠の裾とが相合う高原の処には、いつの間にか北海道の名山として有名なマッカリヌプリがまるで富士山のような貌（かたち）になって、幾多の雪の襞を日光に輝やかしながら全景を現して来た。そしてそれと同時に鬼の歯牙のような巉巖（ざんがん）のそゝりたつ刀掛岬の彼方には赭色（しゃしょく）に爛れた弁慶岬が刻々に延びて来て、その裾に蠣殻のようになって密集しているのは寿都港の民家であって、古宇の方の岸にも葡萄色をした断崖が見えてきて、その間に介在する家はいずれも此辺で名のある漁場だった、沖合には鰊枠の数が漸次（だんだん）と殖えてて、そこらに漂う船のなかにも忙がしそうに立ち働く人の姿がみえてきた。」（「漁場より」）

⑪　弁慶の刀掛岩

⑫　鰊御殿とまり

幹彦はこのあと、泊に入ります。当時は泊にいくつかの番屋がありました。その中の「川村家」と「武井家」の番屋をつなげ、往時の繁栄と歴史を伝えるのが「鰊御殿とまり」です。親方と出稼ぎ漁夫との生活空間が土間で分離された、鰊番屋独特の造りで、中には当時の風俗を伝える生活用品、着物、屏風絵などが飾られ、豊かだった網元の生活を垣間見ることができます。

「泊へ着いたのは昼少し前だった。山の畑は数の子を干す菰場（むしろば）に変って、海岸から山の中腹まではすべて鰊棚で掩（おお）われていた。いかに大漁とは云いながらこれだけの鰊がと思うと、私はさすがにその夥しさに驚嘆せざるを得なかった。それもその筈、四十貫目一石の勘定で、一晩に一枠三百石（九十袋）もつくのだし、平（のべ）に数えてみると一袋約五十万尾という膨大な数になるのである。そして今年の第一期の漁期は近年にない大漁で、この近辺ではもう一万四千石からの漁があった。（「漁場より」）

鰊漁は百石で今にして３００万円の儲けがあったといわれています。一万四千石というと、４億２千万円！いかに当時の鰊漁が儲かったかが分かります。

「母屋へ入ってみると、そこは八十畳も敷かる広々とした板の間で、二階まで打ち抜いた屋根裏は暗く、四囲には労働者（でめん）達の寝る大棚が釣ってある。真中には大炉が切ってあって、そのまわりにはアイヌのような格好をした労働者（でめん）達が四五十人集まって、今交代で食事をしている最中であった。」

まさにこの鰊御殿のつくりと同じ。
そして物語は、クライマックスを迎えます。

「やがて鰊の時は来た。（中略）「鰊がついた。」という警語は出面の口から口へ伝えられて、沖の差網（さしあみ）の枠さきで見張をしている船では幾箇所となく炎々とした篝火が夜の闇を破りはじめる。（中略）私達は固唾をのみながら見ていた。やがてつくだけの鰊がついてしまったと見えて、沖の方の船から順々枠を起しはじめた。それと同時に労働者（でめん）達が唄う唄声がかすかに流れて来て、はじめはのんびりした漁唄だったが、それが漸次（だんだん）と急調な木遣（きやり）に変っていく。それは陸にいるものに大漁を知らせる一種の信号なのであった。

漁場はそれを聞くと鼎（かなえ）のように沸きたった。その劇的（ドラマチカル）な光景！私は今だにその夜の壮大な光景を忘れることが出来ないのである。」（「漁場より」）

ここまで詳細に鰊漁を描いた作品があるでしょうか。大漁に沸き立つ当時の様子を、生き生きと伝えてくれます。
長田幹彦の「漁場より」は優れたルポルタージュでもあるのです。

有島武郎（ありしま たけお）「生れ出づる悩み」

　有島武郎の名作「生れ出づる悩み」が、岩内出身の漁夫画家、木田金次郎をモデルにしたものであることはよく知られています。

　木田金次郎は、岩内町に生まれ、尋常高等小学校を卒業後は東京の開成中学（のち退学し京北中学）に通いながら絵を描き始めます。この時期「白樺」を愛読するなどして文学にも傾倒しますが、１７歳の時、家業を継ぐために中学をやめて帰道し、偶然目にした有島の絵画に深い感銘を受けました。そして、札幌にあった有島の家を訪問するのです。

　突然やってきて「絵を見てくれ」という見知らぬ青年に有島は戸惑いますが、その作品を見たとたん、その才能に驚きます。

「君の画がなんといっても私の反感に打ち勝って私に迫ってきた」のです。

⑬　有島武郎文学碑　（「小さき者へ」の一部が刻まれています。）

　そこから有島と木田の交流が始まりました。そして、東京に行って才能を開花させたい、という木田に対し、有島は岩内にとどまって描くべきだ、と勧めました。その教えを守り、木田は家業の漁の合間に画を描く、という生活を続けていました。

　漁をしていても、岩内港から見る山々は木田の心をつかんで離さず、彼はちょっとした漁の合間にも、懐にスケッチ帳と一本の鉛筆を潜ませて、山へ出かけるのです。

⑭　岩内港

　「雪に蔽われた野は雷電峠の麓の方へ爪先上りに拡がって、折から晴れ気味になった雲間を漏れる日の光が、地面の蔭日向を銀と藍とでくっきりと彩っている。寒い空気の中に、雪の照り返しがかっかっと顔を火照らせる程強く射して来る。（中略）

　何んと云う宏大な厳かな景色だ。胆振の分水嶺から分れて西南を指す一連の山波が、地平から力強く伸び上って段々高くなりながら、岩内の南方へ走ってくると、そこに図らずも陸の果てがあったので、突然水際に走りよった奔馬が、揃えた前足を踏み立てゝ、思わず平頸を高く聳かしたように、山は急にそゝり立って、沸騰せんばかりに天を摩している。」

（「生まれ出ずる悩み」より）

　大正１２年、有島が軽井沢で情死。このことは木田に大きな衝撃を与えました。これを機に木田は漁師をやめ、画家として生きる道を選択します。しかし、有名な小説のモデルというイメージは、木田に大きな重圧となりました。

　さらに、昭和２９年９月、台風１５号による岩内大火で、彼の作品は家財もろともほとんど焼失してしまいます。しかし、これによって吹っ切れたのか、この後の彼の作風は変わり、色、タッチ、色線がより自由に走るようになりました。

岩内港から稲穂峠の方角を見たところ。
そびえ立つ山々が望めます。

彼の作品は「木田金次郎美術館」に収められています。この建物は、旧岩内線岩内駅跡地に建つことから、ターンテーブル（転車台）と列車をイメージした円筒部と箱形部からなっています。また、鰊漁で栄えた岩内の歴史を意識し、外壁は鰊番屋をイメージしているそう。

「山ハ絵ノ具ヲドッシリ付ケテ、山ガ地上カラ空ヘモレアガッテイルヨウニ描イテ見タイモノダト思ッテイマス」と語った木田の作品には、岩内を離れず見つめ続けた画家だからこその色彩の深み、厚みがありました。館内に展示された木田の遺品のパレットには、絶筆「バラ」の色が残ったまま。最後まで精力的に描いた画家の魂を感じました。

⑮　木田金次郎美術館

開館時間　午前１０時～午後６時（入館は午後５時半まで
休館日　月曜日（ただし、祝日にあたる場合はその翌日）
年末年始（１２月２８日～１月２日）
入館料　一般５００円、高校生２００円、小中学生１００円

水上（みずかみ）　勉（つとむ）　「飢餓海峡」

昭和４０年に映画化され大ヒットした、水上勉の「飢餓海峡」。この小説は、昭和２９年に起こった「洞爺丸転覆事故」や「岩内大火」を題材としており、貧困の中に生きる人々の悲哀が描かれています。

水上勉は、昭和３６年に講演会で岩内町を訪れた際、洞爺丸転覆事故と同日に岩内町で大火が起こったことに関心を示し、帰るときに「この町から人殺しを出しますよ」と言ったといいます。そして帰京後、その構想をもとに執筆。翌年１月には週刊朝日で連載が始まりました。

岩内町でもロケが行われ、多くの町民が集まり、町全体が沸き立ったそう。岩内町郷土館には当時の写真が展示されています。

⑯　岩内町郷土館

開館時間：午後９時～午後５時
休館日：月曜日〈祝日の場合は翌日〉１２月~翌年３月

夏目（なつめ）漱石（そうせき）　本籍地

⑰　夏目漱石本籍地の碑

あの文豪、夏目漱石の本籍が岩内町にあったことをご存じでしょうか。

明治３５年から大正３年まで、岩内町に本籍を置いていたのです。当時北海道には徴兵制が敷かれておらず、徴兵を免れるために移したとみられています。漱石自身は、生涯岩内を訪れることはありませんでした。

岩内町郷土館には、戸籍の写しが展示されており、本籍のあった場所には、碑が建てられています。
ちょっとわかりにくい場所ですが、地図を片手に出かけてみるのも面白いですよ。

日本人なら誰もが知っている、あの文豪が後志に本籍を置いていたなんて、ちょっと嬉しくなります。

生誕150年で岩内町郷土館企画展

漱石が本籍 関係に光

【岩内】郷土館は31日、文豪、夏目漱石生誕150年にちなんで企画展「漱石と岩内展」を始める。漱石は明治、大正期に岩内に本籍を置いており、長女鞠を初めて展示、岩内に言及している作品の一部なども紹介する。（安本浩之）

漱石は明治28年（1895）から大正3年（1914）まで岩内に本籍を置いていた。漱石が本籍を移したとされる東京の牛込区（現・新宿区）は徴兵制が敷かれておらず、理由は徴兵逃れとみられている。

当時、本籍以外で90日以上住んでいる者は徴兵の対象となるが、岩内では徴兵制が敷かれていたとされる。漱石は生涯、岩内を訪れることはなかったという。

同館は、漱石の戸籍の写しは常設展示しているが、今回の書類は漱石に関する唯一の原本の書類となる。

この書類には漱石の所は、現在の岩内町高台の住所が記されている。一方で、漱石は岩内の中で本籍地を移しており、企画展ではその変遷をたどる資料も紹介する。企画展は4月19日まで。観覧料は町外の一般客200円など。

夏目漱石が長女鞠の出生届の内容を修正したとみられる書類

長女出生届関連書類を初展示

漱石の養子伸一は「キヨ」とされ、この書類で戸籍に出実父養記に改めている。坂井館長は「漱石と岩内との関わりを示す貴重な資料」と話している。

漱石の養子伸一は「キヨ」とされ、この書類で戸籍に出実父養記に改めている。坂井館長は「漱石と岩内との関わりを示す貴重な資料」と話している。

漱石は岩内の中で本籍地を移しており、企画展ではその変遷をたどる資料も紹介する。企画展は4月19日まで。観覧料は町外の一般客200円など。

この書類は1899年（明治32年）9月、熊本市を通じて、当時設置されていた道庁の出先である岩内支庁に手続きする過程で作成されたとみられる。内容は夏目金之助（漱石）が長女鞠の出生届について、妻鏡の名を「キヨ」と変更することや、漱石自身の生年月日を旧暦の慶応三年（1867年）1月6日（新暦2月10日）から同月5日（同2月9日）に変更することだ。

漱石の養子伸一は「キヨ」とされ、この書類で戸籍に出実父養記に改めている。坂井館長は「漱石と岩内との関わりを示す貴重な資料」と話している。

漱石は岩内の中で本籍地を移しており、企画展ではその変遷をたどる資料も紹介する。企画展は4月19日まで。観覧料は町外の一般客200円など。

この書類は1899年（明治32年）9月、熊本市を通じて、当時設置されていた道庁の出先である岩内支庁に手続きする過程で作成されたとみられる。内容は夏目金之助（漱石）が長女鞠の出生届について、妻鏡の名を「キヨ」と変更することや、漱石自身の生年月日を旧暦の慶応三年（1867年）1月6日（新暦2月10日）から同月5日（同2月9日）に変更することだ。

漱石の養子伸一は「キヨ」とされ、この書類で戸籍に出実父養記に改めている。坂井館長は「漱石と岩内との関わりを示す貴重な資料」と話している。

漱石は岩内の中で本籍地を移しており、企画展ではその変遷をたどる資料も紹介する。企画展は4月19日まで。観覧料は町外の一般客200円など。

この書類は1899年（明治32年）9月、熊本市を通じて、当時設置されていた道庁の出先である岩内支庁に手続きする過程で作成されたとみられる。内容は夏目金之助（漱石）が長女鞠の出生届について、妻鏡の名を「キヨ」と変更することや、漱石自身の生年月日を旧暦の慶応三年（1867年）1月6日（新暦2月10日）から同月5日（同2月9日）に変更することだ。

漱石の養子伸一は「キヨ」とされ、この書類で戸籍に出実父養記に改めている。坂井館長は「漱石と岩内との関わりを示す貴重な資料」と話している。

漱石は岩内の中で本籍地を移しており、企画展ではその変遷をたどる資料も紹介する。企画展は4月19日まで。観覧料は町外の一般客200円など。

この書類は1899年（明治32年）9月、熊本市を通じて、当時設置されていた道庁の出先である岩内支庁に手続きする過程で作成されたとみられる。内容は夏目金之助（漱石）が長女鞠の出生届について、妻鏡の名を「キヨ」と変更することや、漱石自身の生年月日を旧暦の慶応三年（1867年）1月6日（新暦2月10日）から同月5日（同2月9日）に変更することだ。

漱石の養子伸一は「キヨ」とされ、この書類で戸籍に出実父養記に改めている。坂井館長は「漱石と岩内との関わりを示す貴重な資料」と話している。

漱石は岩内の中で本籍地を移しており、企画展ではその変遷をたどる資料も紹介する。企画展は4月19日まで。観覧料は町外の一般客200円など。

この書類は1899年（明治32年）9月、熊本市を通じて、当時設置されていた道庁の出先である岩内支庁に手続きする過程で作成されたとみられる。内容は夏目金之助（漱石）が長女鞠の出生届について、妻鏡の名を「キヨ」と変更することや、漱石自身の生年月日を旧暦の慶応三年（1867年）1月6日（新暦2月10日）から同月5日（同2月9日）に変更することだ。

漱石の養子伸一は「キヨ」とされ、この書類で戸籍に出実父養記に改めている。坂井館長は「漱石と岩内との関わりを示す貴重な資料」と話している。

漱石は岩内の中で本籍地を移しており、企画展ではその変遷をたどる資料も紹介する。企画展は4月19日まで。観覧料は町外の一般客200円など。

この書類は1899年（明治32年）9月、熊本市を通じて、当時設置されていた道庁の出先である岩内支庁に手続きする過程で作成されたとみられる。内容は夏目金之助（漱石）が長女鞠の出生届について、妻鏡の名を「キヨ」と変更することや、漱石自身の生年月日を旧暦の慶応三年（1867年）1月6日（新暦2月10日）から同月5日（同2月9日）に変更することだ。

漱石の養子伸一は「キヨ」とされ、この書類で戸籍に出実父養記に改めている。坂井館長は「漱石と岩内との関わりを示す貴重な資料」と話している。

漱石は岩内の中で本籍地を移しており、企画展ではその変遷をたどる資料も紹介する。企画展は4月19日まで。観覧料は町外の一般客200円など。

平成２９年９月３０日付け道新でも取り上げられていました！

後志管内文学散歩　地図（日本海側編）

　その荒々しさ故に風景に味わいを与える日本海。その沿岸は、その昔ニシン漁に沸いていました。浜にはニシンが溢れ、「男も女も此の世界中に鰊よりほかには何の仕事もないように鱗にまみれながらせっせと働いて」（「漁場より」）いた時代。時は過ぎ、時代が変わっても人々は営みを続け、またそこに新しい歴史を生み出しています。

　文学をたどると、その地の歴史が見えてきます。文学を通じてタイムスリップし、時代を歩いてみる・・・・そんな旅は、いかがでしょうか。

〈参考文献〉「白鳥古丹」吉田一穂傑作選　幻戯書房　／「飢餓海峡　上・下」水上勉　著　新潮文庫　／「後志芸術の絆」しりべしミュージアムロードパンフレット／「突貫紀行」　幸田露伴　著　青空文庫　／「HO（ほ）Vol.119 特集　いま知りたい　小樽・ニセコ・岩内」／「北海道文学全集　第二巻　漂泊のエレジー」　立風書房　／「北海道文学全集　第三巻　ヒューマニズムの照明」　立風書房　／「北海道文学ドライブ　第一巻　道央編」　木原直彦　著　イベント工学研究所　／「望郷」森瑤子　著　学習研究社　（５０音順）
〈協力〉市立小樽文学館　玉川館長